

佐和高吹奏楽部と共演

27日 20分かかる難曲挑戦

気鋭のサクソ奏者・上野さん

若手のサクソフォン(サククス)奏者として国際的な注目を集めている東海村生まれの上野耕平さん(24)が今年もひたちなか市稲田の県立佐和高校吹奏楽部の生徒たちと共演する。上野さんと高校生たちの出会いは昨年開いた30周年の定期演奏会での共演がきっかけ。今回はソプラノサクソフォンなど3種類のサクソフォンを使う難曲「ニューヨークからの4枚の絵」に挑戦する。27日に同市青葉町の市文化会館大ホールで行われる佐和高校の第31回定期演奏会で披露する。入場無料。



佐和高校吹奏楽部の高校生を指導する上野耕平さん(右端) = 5日、ひたちなか市稲田

上野さんは8歳でサクソフォンを始めた。東京芸術大時代から注目を集めた演奏家で、2011年の第28回日本管打楽器コンクールでサクソフォン部門で史上最年少で第1位と特別大賞を獲得した。英国で開かれた第16回「サクソフォンコングレス」でソリストとして演奏し、世界の巨匠たちに認められた。15年9月には日本フィルと共演している。現在、「The

Rev Saxophone Quartet」のソプラノサクソフォン奏者で、「ばんだウインドオーケストラ」のコンサートマスターなどを務めている。

上野さんは、13日に東京文化会館大ホールで「ばんだウインドオーケストラ with ジョナサン・ヘイワード」の演奏会、15日から23日までヨーロッパ各地で演奏を予定。今年4月には川崎市のミューザ川崎など全国各地で演奏会を実施し、6月にも親子演奏会(有

楽町朝日ホール)など東京、神奈川県内の演奏会がめじろ押しだが、日程の合間を縫って5日に今年2回目の佐和高訪問となった。

「ニューヨークからの4枚の絵」は01年秋、イタリアを代表するサクソフォン奏者、フェデリコ・モンデルチのために作られた曲。4楽章から成り、ソプラノサクソフォンで始まる第1楽章「ドリーミー・ドーン」、第2楽章「タンゴ・クラブ」はラテンの調べが流れるクラブの喧噪をアルトサクソフォンで表現するなど、曲中では3種類のサクソフォンが使われる。古典音楽からタンゴまでリズムもさまざまで、表現力を極限まで要求される。全曲20分でオーケストラ版、ピアノ版、弦楽合奏とピアノ版などがある。

5日の練習終了後、上野さんは「高校生たちと前回とは異なる表現力の多彩さを要求される難曲で、音楽の奥深さの一端を観客に伝えられれば、生徒たちの自信や取り組みの飛躍につながると思う。生徒たちはどんどんうまくなっている。本番が楽しみ」と話していた。

(萩庭健司)